



慶應義塾大学ビジネス・スクール

四季株式会社

浅利慶太

生い立ち

5

浅利慶太は1933（昭和8）年3月16日東京に生まれた。築地小劇場の創立者の一人だった浅利鶴雄を父に、元前進座の女優浅利陽子を姉に持つ家庭で育った。父浅利鶴雄は、築地を割合早い時期に辞め、戦前「三田英児」の芸名で松竹の映画に出演したり、浅草国際劇場の初代総支配人、大谷竹次郎松竹社長の秘書役なども務めていたが、元来芝居好きだったために創立まもない俳優座の研究生になって演劇を続けた。鶴雄はまた二代目市川左団次の甥に当たる。三代目を継がせようという目論見で、浅利は3、4歳の頃1年半ほど左団次の家に預けられたことがあったが、これは鶴雄の反対で実現しなかった。このような環境であったために、むしろ子供の頃は演劇が嫌いだったという。1944（昭和19）年、軽井沢に疎開をしていた浅利の家族は、父親が俳優座の研究生になることによって、ただでさえ苦しい疎開生活が一段と苦しくなった。彼にとっては憎き演劇だったのである。

終戦後東京に帰り、慶應普通部に入って野球の選手になるのが夢だった。しかし、慶應に行けるような状況ではなかったので、杉並中学（現中央大付属杉並高校）に入学する。1949（昭和24）年、念願の慶應高校に入学した。慶應で野球をやる夢を持っていたものの、当時の慶應の野球部は、大学はトップレベル、高校も神奈川県代表で甲子園クラスであり、通学の不便さやアルバイトをしなければならないという経済的な事情から、野球部は断念した。全員どこかの部に所属しなければならなかったため、演劇部の責任者だった担任から誘われたこともあり演劇部に入部した。

出会い

25

「初めて部室に行った時、薄暗い部屋にトグロを巻いていた先輩たちが「早慶戦でも何でも、学校さえ休みになりゃいい」なんて言ってるんです。野球少年だった僕にとって、早慶戦は至上の価値あるものでしたから、なんてひどい連中だと思ったんです。それが今、劇

本ケースは、慶應義塾大学大学院経営管理研究科博士課程における特別実習の成果としてまとめられたものであり、経営管理に関する適切あるいは不適切な処理を例示することを意図したものではない。

30

ケース作成は慶應義塾大学大学院経営管理研究科和田充夫教授の指導のもとに、同研究科博士課程川又啓子が行った。

（1996年4月作成）